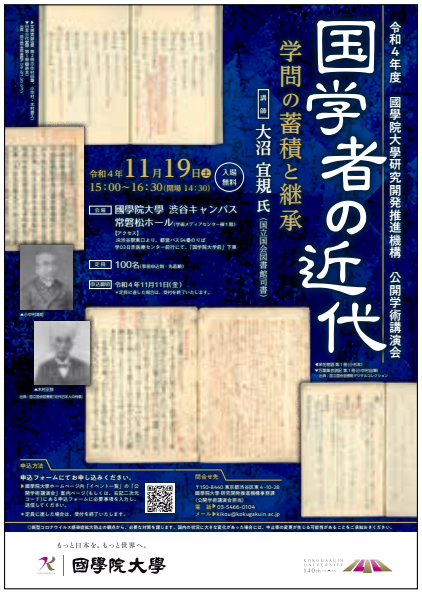
國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol.16 No.2
発行人　笹生　衛
編集人　大東　敬明
〒150-8440　東京都渋谷区東4丁目10番28号
電話（03）5466－0104
FAX（03）5466－9237

公開学術講演会
「国学者の近代―学問の蓄積と継承―」
大沼宜規（国立国会図書館司書）

令和四年度の研究開発推進機構公開学術講演会は、大沼宜規氏（国立国会図書館司書）を講師に招き、「国学者の近代―学問の蓄積と継承―」と題して、令和四年十一月十九日（土）に本学渋谷キャンパス常磐松ホールにて開催された。

本年度、近代の国学者をテーマとしたのは、令和四年十一月四日に國學院大學が創立百四十周年を迎えたためである。明治十五年（一八八二）に神職養成と古典研究を目途に創設された皇典講究所は、国学の学統に連なる人物が深く関わり、國學院大學の母体となった。このことに鑑み、江戸後期から明治前期にかけての百年間にわたる「国学考証派」の活動を対象とする『考証の世紀―十九世紀日本の国学考証派―』（吉川弘文館、令和三年）の著者である大沼宜規氏に講演を依頼した次第である。



概要

講演は、明治十五年に皇典講究所が発足した当時の国学者たちの学問的特徴に迫ることを主題として、彼らの蔵書や文献考証の手法に着目し、考察を行うものとなった。特に、江戸末期から明治期にかけて活躍した国学者である木村正辞と小中村清矩の学問の方法を対象として、その蔵書研究を進めることで見えてくる学問的特徴が提示されるとともに、近世から近代へと継承された国学の学問的営為について紹介・解説する形で講演が進められた。

・はじめに

大沼氏は、まず国学の歴史考証、文献考証という点に言及し、漢学中心の世の中であった江戸時代において、国学者がさまざまな史料を収集・研究した活動の重要性を指摘。続けて、研究史においては、長く否定的な評価があった近代の国学者を対象とした研究が、阪本是丸氏の提言を受けて、平成以降、再評価されることとなり、国学者たちが近代日本の国家建設に重要な役割を果たしたことが既に明らかにされていると述べた。

その上で、本講演では、近代において活動した国学者たちの具体的な学問の方法（考証的方法・蔵書）に着目し、はじめに、多くの国学者たちが蔵書家でもあった意味に触れ、特に考証学者としての評価が高く、蔵書家としても優れた人物であった木村正辞を取り上げて考察を行うとする視点を提示した。

・木村正辞の蔵書と学問

大沼氏は、まず木村正辞（文政十年〈一八二七〉～大正二年〈一九一三〉）の経歴について、幕末期に和学講談所に勤め、明治維新以降に文部省、司法省、東京大学に勤めた万葉学者であり、國學院においても教鞭をとったこと、近世と近代との境に立

目次

◆公開学術講演会
「国学者の近代―学問の蓄積と継承―」大沼宜規（国立国会図書館司書）（宮本誉士）…1頁
◆第47回　日本文化を知る講座
沖縄復帰50年　歴史・文化・沖縄学（池田榮史）……3頁
◆日本文化研究所
国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化 Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective」（星野靖二）……5頁
◆創立一四〇周年（比企貴之）……6頁
◆創立一四〇周年記念　企画展
「近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦寄木細工コレクション―」（渡邉卓・内川隆志）……7頁
◆特別展
「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」（深澤太郎）……8頁
◆日本文化研究所
日本文化研究所研究会について（星野靖二）……10頁
◆宮地直一旧蔵資料の調査・研究・展示（学術資料センター神道資料館部門）……11頁
◆令和四年度　活動報告
「國學院大學「古典文化学」の創出研究事業」（渡邉卓）……12頁
◆令和四年度
國學院大學博物館活動報告（國學院大學博物館）……13頁
◆彙報……14頁
◆資料紹介　奈良県吉野郡天川村　金峯山経塚出土遺物（深澤太郎）……16頁

ち、文献学的な考証を行った学者であることを紹介。その上で、草稿類を含む旧蔵書への着目が必要になること、木村の旧蔵書目録のうち、まとまったものとしては、「欟斎（つきのや）蔵書目録」があり、歴史・物語・地理などの広い分野を所蔵すること、古代研究を意識しているところに蔵書の特徴があることを指摘した。

さらに旧蔵書が現在、数箇所に分散して所蔵されていることに言及し、続いて、これらの蔵書から見えてくる木村の万葉集をめぐる研究の手法を紹介した。すなわち、①文献目録・解題の作成（『万葉集書目』、『万葉集書目提要』）、②『万葉集』のテキストの研究（多数の本文を確認し、一つの本に万葉集の本文の異同を書入れ、集約）、③索引の編集、④覚の作成（言語学的な考証）、⑤先行研究の検討、⑥学者同士の意見交換（小中村など近しい学者との勉強会）などを通して、細かい考証を蓄積していく木村の研究手法である。その上で、木村の代表的著作である「万葉集三弁証」（『万葉集字音弁証』、『万葉集文字弁証』、『万葉集訓義弁証』）が著されたこと、さらには、こうした言語学的な考証の成果をもとに、『万葉集美夫君志』の総合的な解釈に纏められたことを説明した。

そして、これらの研究手法から見えてくる木村の学問的特徴として、漢字への深い造詣があること、古代の日本語の用例研究を徹底的に行って緻密な検討をしていること、その背景には多くの蔵書があること等を指摘した。

・善本の希求と校訂

続いて、大沼氏は、木村が万葉集研究のみならず、漢籍・和書を問わずに広く校合を行っていることに言及。模刻本や模写本を集めることも含めて、より古い本文の情報、あるいは古い文献を集めていくことを重視し、後の人が改めた部分を正して、元の旧色に復元することが肝要であるとした見解を紹介した。

さらに、こうした見解は、木村だけではなく、当時の国学者たちが揃って「復旧」を重視した姿勢に共通して見られるものであり、成立当初の形に文献を「復旧」すること自体が彼らにとって大きな課題であったことを述べた。また、善本の情報は国学者たちの密な人的ネットワークの中で、相互の情報共有、貸し借りをすることで書写をし、蓄積されていったことが窺えるとともに、善本の情報共有を行うことで、本文の整備が進み、学問の基盤が出来ていったことを指摘した。

・復旧から出版へ
～小中村清矩の「六国史」校訂～

続いて、こうした善本の情報共有が行われる意味については、①持っている書物の内容が人によって違うならば研究上の議論が成り立たないこと、②教育の場においても授業のテキストとして共通の文献が必要とされたこと等があることを指摘。そうした状況のなかで、国学者にとって「出版」が課題となっていくこと、具体的には和学講談所における「群書類従」の刊行事業等があることに言及した上で、皇典講究所・國學院にも関わった小中村清矩（文政四年〈一八二一〉～明治二十八年〈一八九五〉）が幕末期に「六国史」を校訂し、それを出版したいとする建言を紀伊藩に提出した経緯について概略、次のように紹介した。

幕末期において紀伊藩の学問所・古学館に勤めた小中村は、六国史の善本がまだなく、校正して善本を作れば古学館の名誉になることを建言。これにより、紀伊藩に六国史の校訂作業が認められ、小中村は作業を進めていくこととなる。しかしながら、明治維新により作業は中断し、その後、明治政府においても小中村、木村等が六国史の校訂を担当して善本を出版しようとする努力を続けたものの、計画は頓挫することとなった。

こうして、幕末期、明治期に六国史校定本の刊行計画は頓挫したが、大沼氏は、これらの作業が無駄足ではなく、近代へと継承されたことを指摘する。

・近代への継承

続いて、大沼氏は、以上の国学者たちの営為が近代へと継承されたことについて、まず黒板勝美が校訂に携わった「国史大系」本が原本校訂の丁寧さと印刷校正の厳密さにおいて高い評価を受けていたことを紹介。底本（流布本）と「国史大系」との本文相違を確認した結果、その「六国史」の標注や校訂注、本文の修正・確定に当っては、小中村による作業がそのまま引き継がれ、「国史大系」（明治版）に利用されていることが判明することを指摘した。そして、明治期における活版の活字印刷の技術が登場する中で、こうした近世以来の国学者による学問的蓄積が活用され、近代の文献出版の基礎となったことを述べた。

さらに、人材の継承という点については、明治十五年から二十一年まで時限的につくられた東京大学文学部古典講習科があり、教員として小中村、木村等の国学者たちが入ったこと、明治十五年には皇典講究所、二十三年には國學院が設置され、古典講習科の関係者が皇典講究所、國學院の事業に関与したことを紹介。続けて、これらが国学継承の場となったことを指摘した。

また、その一事例として、國學院の講師なども務めた池辺義象に言及し、池辺らが近世以来の校訂活動を重視した国学者の学問を引き継ぐ古典講習科で学び、その継承者として文献の校訂や注釈、出版活動の担い手ともなっていくことを説明。そして、こうした明治以降の国学的な学問の拠点として、皇典講究所や國學院が位置していたと述べた。

・おわりに

大沼氏は最後に、文献考証に尽力して来た国学者たちの事績が再評価されることに期待を示し、彼らの資料の探し難さに言及するとともに、国学者に関する基礎的情報をデータベース化して、学問の基盤を作ることが重要であると指摘。國學院大學という場が、国学者たちの学問を継承していること、国際化の時代であるからこそ、日本人にとっての文化的なアイデンティティーが一層必要になっていることに触れ、日本文化に関する研究を牽引してきた研究・教育機関としての國學院大學の今後の成果に期待を寄せて、講演を終了した。

（文責・宮本誉士）

第47回　日本文化を知る講座
沖縄復帰50年　歴史・文化・沖縄学

はじめに

國學院大學博物館では令和四年五月十九日（木）～七月二十三日（土）の間、沖縄の本土復帰五〇周年に因んだ企画展「うちなーぬ　ゆがわりや―琉球・沖縄學と國學院」を開催した。本企画展は琉球・沖縄の歴史や文化の概要を紹介するとともに、琉球・沖縄研究に関わった國學院大學関係者の業績を紹介し、本學が当該地域の研究に果たした役割とその評価について明らかにすることを意図している。

開催期間中は新型コロナウイルス蔓延の影響もあり、水～土曜日の週四日間のみ、十二時から十七時までとする短縮開館となったが、平均して一日あたり百人を超える来館者にお出でいただいた。用意した図録も完売となり、関係者一同の喜びとするところである。

研究開発推進機構ではこの企画展と連携し、令和四年七月二日（土）十三時半～十七時に本學常磐松ホールを会場として、「第四七回日本文化を知る講座―沖縄復帰五〇年　歴史・文化・沖縄学」を開催した。本講座では企画展の展示意図を踏まえながら、研究開発推進機構として「琉球・沖縄研究の現況」を確認することを目的とする。

本講座の開催については、令和四年三月九日に行なわれた「令和三年度第六回研究開発推進機構企画委員会」で深澤太郎准教授、川嶋麗華助教（令和四年四月一日着任）と本文の報告者である池田の担当を決定した。その後、令和四年四月二十日の「令和四年度第一回研究開発推進機構企画委員会」において講座内容が審議・了承され、開催に至ったものである。

なお、講座開催時の受付や案内、記録画像の撮影、機器操作などについては、研究開発推進機構教員並びに職員が連携して分担し、対応に当たった。

また、開催にあたっては新型コロナウイルス流行中でもあることから、感染対策に万全を期して、事前申込制による定員制（一〇〇名）とした。従来の自由参加制とは異なる開催手法ではあったものの、当日の会場にはほぼ定員一杯の聴講者を迎えることができた。講座開催後に新型コロナウイルス感染者が生じたという情報もなく、安全かつ盛会裏に講座を終えたことを記しておきたい。

講師の顔ぶれ

さて、「歴史・文化・沖縄学」を表題に掲げた今回の講座では長年琉球・沖縄研究に携わって来られた小島瓔禮琉球大学名誉教授（本學六六期文・六八期修文・七一期博文）、小野正敏国立歴民俗博物館名誉教授に講師をお願いした。小島氏は『万葉集』をはじめとする日本の古典文学研究を基軸に据えつつ、琉球・沖縄の文学・民俗学研究に邁進されている。また、小野氏は福井県越前一乗谷朝倉氏遺跡の調査研究に従事した経験を踏まえて、日本の中世考古学研究を牽引する立場にあり、その過程で沖縄諸島、中でも八重山諸島の重要性を喚起する調査研究を進められている。加えて、主催者である本學研究開発推進機構からは池田が講演者の一人を務めた。

講座の内容

講座の一人目として池田が「琉球・沖縄の歴史・文化研究概観」と題し、「一、琉球列島の地理的環境」「二、琉球・沖縄史研究の枠組み（パラダイム）の推移」「三、戦前における沖縄学研究と考古学」「四、戦後における沖縄考古学研究の進展」「五、琉球・沖縄史の時代区分と古琉球研究への関心の高まり」「六、現在そしてこれからの琉球・沖縄の歴史・文化研究」についての概略を述べた。

そこで指摘したのは、沖縄戦後の琉球・沖縄研究が琉球列島の地域的独自性を評価する傾向を強めたことにより、日本を含めた他地域との関係を問う研究が停滞したこと、これに対して沖縄復帰後には沖縄諸島以外の奄美諸島や宮古・八重山諸島などのさまざまな分野における調査研究が飛躍的に進み、それぞれの地域特性や地域間関係の把握、さらにはこれを踏まえた琉球列島と日本を含むアジア諸地域との関係を見据えた研究が展開しつつあることである。

なお、講演に際しては予め作成した文章資料を配布するとともに、図表や写真を取り込んだパワーポイント資料を用い、聴講者にとっては日頃あまり接することのない琉球・沖縄の歴史や文化について、総合的包括的理解が進むことを心がけた。

続いて、小野氏は自らが取り組んだ八重山諸島での調査研究を踏まえて、八重山諸島における集落遺跡の変遷過程とその歴史的評価について述べられた。小野氏も事前に「一、「グスク」がない八重山」「二、竹富島の廃村と御嶽」「三、石積みを持たない現集落と重なる遺跡」「四、集落の廃絶と新たな集落、御嶽祭祀」「五、英雄たちと本拠の景観」につ

いて記した文章資料を準備しており、これに基づいたパワーポイント資料を用いて講演を行なわれた。

小野氏によれば、八重山諸島では十二世紀末頃から集落遺跡が出現し、十三世紀に増加して十四・十五世紀代まで存続するものの、十五世紀末にはほとんどが廃絶するという。この要因は十二世紀末から八重山諸島内では自律的な社会変化による集落遺跡の形成が進んだものの、十五世紀末には沖縄諸島における支配権を確立した琉球中山王による統治拡大政策が八重山諸島に及んで、中山王支配の下に集落の再編が行なわれたことにあるとする。

池田や小野氏の講演が主に考古資料を踏まえた内容であったのに対して、次の小島氏の講演は文献記録と琉球方言との考証に基づく琉球・沖縄の歴史や文化の系統を論じる内容であった。

講演に先立ち、小島氏も事前に自らの講演論旨をまとめた「上代語「苗（なへ）」（稲）が生きている琉球方言」と題する文章を作成されていた。講演では「苗（なへ）」が稲の幼生を意味する言葉であるという理解が今日の日本では一般的になっているが、『風土記』などの記載を踏まえれば「苗（なへ）」の本来の語意は「稲」を示しており、これを継承した「苗（なへ）」の呼称が現在も沖縄諸島から八重山諸島までに存続してみられることを指摘された。

その上で、このことは琉球方言が日本の上代語を母語とすることの名残であり、琉球列島の文化形成に日本文化からの影響が大きく関わっていることの証左であると論じられた。

討論

講演の後、講演者三名が壇上に登り、池田の進行の下に、講演を踏まえた討論が行なわれた。この際、冒頭に各講演者による補足説明が行なわれ、その後、予め会場の参加者に配布されていた質問用紙に寄せられた質問への回答があった。

質問には琉球・沖縄文化と日本文化との関係に触れたものが多かったこともあり、池田はこれについての近年の考古学的研究動向をあらためて紹介した。これによると、琉球列島に稲作を含む穀物栽培が定着するのは日本本土とは異なる十一世紀代以降であり、その背景には日本から琉球列島への大規模なヒトやモノの移動があったと考えられる。

その論拠として、近年の奄美諸島や沖縄諸島、さらには宮古・八重山諸島の十一～十二世紀に位置付けられる遺跡からは、白磁をはじめとする中国産陶磁器や長崎県西彼杵半島産滑石製品、当該時期の奄美諸島徳之島で生産が開始されたカムィヤキ窯産陶器など、以前には見られなかった遺物が共通して見られるようになるとともに、イネやムギ、さらにはアワなどの穀物資料や牛・馬などの家畜動物資料が検出され始める。また、住居の構造も従前の不定形竪穴住居や平地住居から定型化した掘立柱建物へと移行する。すなわち、この段階の琉球列島全域において、さまざまな文化的変容が一気に進行するのである。

ここで見られる文化的変容は琉球列島内部での自律的発展とは考え難く、列島外からの影響によって生じたとすることが理解しやすい。

このような琉球列島全域での文化変容が起こった背景には十一～十二世紀段階のアジア社会において、硫黄や夜光貝・法螺貝などの大型貝類をはじめとする琉球列島産物の需要が高まったこと、さらには中国宋の南下（一一二七年）に伴って琉球列島沿い航路の重要性が高まったことなどの影響であると想定される。

琉球列島社会の文化的変容、さらには琉球国と琉球文化圏の成立はこのような東アジア社会における国際環境変化の中で生じたのであり、さらにはその後の中国明の建国以降、交易関係を結んだ東南アジア的要素を加えることによって、今日に繋がる琉球列島の文化的特徴が形成されることとなるのである。

小野氏による八重山諸島の集落構造の変化や小島氏による琉球方言や民俗事例のあり方はこのような琉球列島社会の文化的変容過程の中で理解して矛盾がない。

討論ではこのことが共通認識化されるとともに、今後は琉球列島内の各島々において、十一～十二世紀以降の文化変容の進行過程について、小島氏が専門とする文学や民俗学、小野氏や池田が専門とする考古学に加えて、歴史学や動物学、植物学などさまざまな研究分野からの検討の深化が求められることを確認して終了した。

まとめ

本講座はこれまで日本本土ではあまり関心が向けられることのなかった琉球・沖縄の歴史・文化、及び当該地域に関する研究である「沖縄学」に焦点を当てて実施した。折から新型コロナウイルス流行中であったにもかかわらず、多くの方々の参加を得ることができ、本學における琉球・沖縄研究の蓄積が着実に継承されていることを確認するとともに、今後への新たな展望を開く機会ともなった。本講座の開催を契機として、本學をはじめとする研究機関における琉球・沖縄に関するさまざまな研究がますます展開することを祈念したい。

（文責・池田榮史）

日本文化研究所
国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化 Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective」

日本文化研究所は、二〇二二年十二月十一日に国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化 Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective」を開催した。以下概要を記す。

日時：二〇二二年十二月十一日（日）十三時～十七時半
場所：國學院大學渋谷キャンパス一二〇周年記念二号館一階二一〇一教室

第一部「大学ミュージアムの中の宗教文化」
発表者・題目：
・深澤太郎（國學院大學博物館准教授）「来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化」
・熊谷貴史（佛教大学宗教文化ミュージアム学芸員）「展示するモノと展示するコト：仏教文化の視点から」
・下園知弥（西南学院大学博物館助教・学芸員）「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」
コメンテーター：
・田澤恵子（公益財団法人古代オリエント博物館研究部研究部長）
司会：
・吉永博彰（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所助教）

第二部「多様性の中の日本の宗教文化」
発表者・題目：
・エミリ・アンダーソン（全米日系人博物館学芸員）「強制収容所内の信仰と宗教：アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験」
・北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」
コメンテーター：
・高橋典史（東洋大学社会学部国際社会学科教授）
司会：
・星野靖二（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所教授）

使用言語：日本語
参加費：無料
主催：國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
参加者：八〇名程

開催趣旨：
「宗教文化」について学ぼうとする際に、文字で書かれたものが重要であることはいうまでもないが、物体としてのモノや、実践としてのコトも、また欠かすことのできないものである。本国際研究フォーラムでは、こうしたモノやコトをみせる場としてのミュージアムに焦点を合わせ、その実践や可能性について考えたい。

第一部の質疑応答の様子

第二部の質疑応答の様子

全体を二部に分け、第一部「大学ミュージアムの中の宗教文化」では、宗教系大学に設置されている大学ミュージアムの展示担当者に登壇をお願いし、宗教系大学という、ある意味で特定の宗教伝統と当事者的に関わっている立場から、どのような展示の試みがなされているのか、報告してもらって議論する。第二部「多様性の中の日本の宗教文化」では、アメリカにおける日系人の宗教文化や、アイヌの宗教文化についての展示について報告してもらい、それらの豊かさについて学びながら、同時に日本で「日本の宗教文化」をみせようとする際の自明性のようなものを、少し異なる視点から照射してみたい。

第一部・二部を通して、必ずしも宗教実践の直接の現場ではないミュージアムにおいて、どのように宗教文化をみせることができるのか、またデジタル化やインターネットを通じた公開が進む今、モノを現実空間でみせるということに、どのような意味があり、どういった工夫をしているか、といった点などについても議論を深めたい。

各発表は、様々なミュージアムにおける具体的な展示の工夫について触れるもので、それを踏まえた上で質疑応答が行われた。

なお、本国際研究フォーラムは「ミュージアム」に焦点を合わせるものであるため、本学博物館から様々な形で協力を得た。特に、本学博物館の特別展「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」の開催期間中であったため、特別にフォーラム終了後に申込制の展示見学を設定し、深澤太郎氏より「展示担当者がミせる宗教文化」という題で解説を行ってもらい、大変好評であった。

（文責・星野靖二）

創立一四〇周年

創立一四〇周年記念式典

令和四年（二〇二二）は、学校法人國學院大學の母体である皇典講究所の創立（明治十五年〈一八八二〉）から一四〇周年の節目の年にあたった。創立記念日である十一月四日には、創立記念式典が挙行された。

これに先立つ十一月一日、渋谷キャンパスにおいて創立記念祭と関係物故者慰霊祭が執り行われた。なお、十月二十五日には、渋谷キャンパスにおいて、歴代皇典講究所総裁・副総裁、所長、理事長、院長、学長らの御墓遙拝式を、翌二十六日には豊島岡御墓所および護国寺檀徒墓地への参拝・展墓をそれぞれおこなっている。

彬子女王殿下の台臨をえて、十一月四日に創立記念式典がグランドプリンスホテル新高輪（東京都港区）で挙行された。式典は、針本正行学長による『告諭』の奉読、佐柳正三理事長による『告諭』に立ち還り「オール國學院」での邁進の決意を新たにした式辞と進み、彬子女王殿下からは、ワークショップなどを通じて、「建学の精神の継承と実践とがなされていることを実感した」とのお言葉をいただいた。続いて、来賓祝辞（神社本庁鷹司尚武統理、学校法人日本大学林真理子理事、一般財団法人國學院大學院友会吉田茂穂会長）、祝電披露と粛々と進められた。

また創立記念式典に併せて、井上洋一氏（奈良国立博物館館長）を講師に迎え、「文化遺産と社会」と銘打った記念講演がおこなわれた。

その後、会場を移し、創立百四十周年記念祝賀会が催され、創立から一四〇回目の節目は盛大に祝われた。

『國學院大學百四十周年記念誌』

令和四年に創立一四〇周年が迎えられるにあたり、「創立一四〇周年記念事業」の一つとして、『國學院大學創立百四十周年記念誌』の編纂が計画された。いまやこのような周年記念のイベントに際して、『記念誌』あるいは『年史』編纂といった記念刊行物が作成されることは珍しくはないけれど、新型コロナウイルス感染症の拡大という世界的危機の現出であったり、経済格差の拡大や地方の衰退、とりわけ学齢人口の顕著な落ち込みなど、高等教育界を取り巻く状況の厳しさを考えるとき、大学の歩みの一里塚として『記念誌』『年史』編纂の意義はいっそう高まっているといって過言ではない。

今回、編纂をおこなった『國學院大學百四十周年記念誌』（A4判・二二二頁〈非売品〉）は、平成二十四年（二〇一二）から令和四年に至る、法人・大学および傘下教育機関ほかの動静について、詳細なデータを付して編纂したものである。同誌の構成は『校史』vol.33（國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター、二〇二三・二）に詳しい。

本誌の原稿執筆は、各部局や関係各組織にたいし、業務・事業ごとの執筆テーマを設け、執筆ないしは共同執筆する体制を採用し、そのうえで提出された原稿を編集担当者にて確認・調整することとした。正式かつ本格的に始動したのは、令和四年四月になってからのことである。実質六ヵ月余りでの記念誌の編纂は、決して余裕あるスケジュールとはいえないものであった。なお、同誌の構成は、あらかじめ校史・学術資産研究センターにおいて『國學院大學百三十周年記念誌』を下敷きに一四〇周年版への組み直し（再検討）を内々に進めていた。

関係部局に平成二十四年から令和四年に至る諸種のデータの収集と精査を依頼したのは四月十三日である。四月二十七日には組版・印刷の業者が株式会社小薬印刷所と決定した。

五月二十五日、各執筆担当部門の所属長を招集して執筆説明会を催した。その後、初校（七月十五日）、再校（九月上旬）、三校（十月六日）、念校（十月十二日）、抜念々校（十月十三・十四日）と進み、十月十七日に校了した。印刷・製本および化粧箱の用意・封入などを経て、十月二十八日午後に無事に納品された。

なお、編集実務は渡邉卓准教授、比企貴之助教（ともに校史・学術資産研究センター）、山口輝幸（学術メディアセンター事務部 研究開発推進機構・図書館担当部長）が担当した。

（文責・比企貴之）

創立一四〇周年記念　企画展
「近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦 寄木細工コレクション―」

展示概要

本学は創立以来の有栖川宮家との御縁から、有栖川宮家の祭祀を継承された高松宮宣仁親王妃喜久子殿下の御高配により、御襲蔵してこられた有栖川宮家ならびに高松宮家ゆかりの品々を拝領し収蔵している。この度、國學院大學創立百四十周年を記念して、両宮家伝来の品々に加え、半世紀にわたり国内外の寄木細工を収集してこられた世界的コレクターである金子皓彦氏のコレクションを、「近代工芸の精華」として展示した。

有栖川宮家・高松宮家の名品

本学で収蔵する有栖川宮家・高松宮家ゆかりの品々から、今回の展示では、近代の漆工・金工作品を中心に展示した。これらの品々の多くは、天皇家の慶弔時に際しての下賜品、または官公庁や民間からの献上品として宮家に伝来したものである。そのため、いずれもが精巧で美術的価値が高く、宮廷文化のみやびと歴史を伝えるものとして貴重な資料である。近代の宮家は、美術工芸の分野のスポンサーとして近代に伝えられた伝統技術を現代に継承していく上で大きな役割を果たしている。

「漆工」は英語でjapanと表記されるように、日本を代表する工芸の一つである。明治天皇が有栖川宮熾仁親王に下賜した「業平蒔絵印籠」や、大正天皇・貞明皇后の銀婚式に際して京都府から献上された「宝石御箪笥」の精緻さには目を奪われるものがあり、これら漆工の名品が展示された。また「金工」については、有栖川宮家・高松宮家においても、天皇家からの下賜品などとしていくつもの作品が伝えられている。勲章やボンボニエールなどがその代表である。

金子皓彦コレクション

院友の金子皓彦氏（七二期史）が永年にわたって蒐集された寄木細工は、質、量ともに世界屈指のコレクションとして知られている。東京女学館大学で教鞭を執る傍ら、ヨーロッパを中心に世界各国で蒐集された数万点に及ぶ貴重な工芸資料として、近年その価値が高く評価されている。同コレクションの展示会は、これまでに日本各地で開催されてきたが、今回は母校での開催ということで、その粋の一滴を提供頂き、慶事に華を添えていただいた次第である。

寄木細工のルーツは、エジプト一八王朝のツタンカーメンの時代にまで遡り、同じ頃西アジア一帯で寄木技術を用いた作品が確認できる。日本で確認できる最古の寄木細工は、盛唐時代の中国からの請来品で、正倉院御物の「木畫紫檀棊局」など三〇点以上が確認されているが、わが国では、蒔絵や螺鈿などの漆工芸が好まれたためか、平安時代以降の工芸品にその姿は確認できず、近世後期に新たな工芸として再出発する。今回展示した石のモザイク画は、アパメア遺跡（シリア 紀元前三世紀頃）等の出土品と同時代の作品である。色の異なる石材で鳥の文様を描き出したもので、既に同時代に製作されていた寄木細工との共通性が見いだせる資料と言える。その後、寄木の技術は西アジアからヨーロッパ全土に拡がったのである。

日本では、静岡（駿府）の寄木細工の歴史が古く、十七世紀の初めに三代将軍徳川家光が、久能山東照宮や浅間神社の造営に際して諸国から漆工を招いたことに始まる。土地の気候が漆工芸に適していたことから、造営後も漆工たちは駿府に定住しその技術を伝え、駿河漆器の基礎が築かれた。明和元年（一七六四）には駿府城下に土佐屋久七が店を構えて駿河漆器を売り出し、その評判が広まり東海道を往来する諸大名が所望し、陸路や海路を通じて全国に送られたのである。駿河漆器の技術は、江戸後期頃に箱根にも伝わり、近代には箱根細工として発達した。

箱根では、種類豊かな木々に着目し、色や木目の違う様々な木を寄せ合わせて加工し、盆や箱が製作された。これが箱根寄木細工の始まりとされ、文化・文政頃にはすでに販売されていた記録がある。またオランダ・ライデンの国立民族学博物館にも寄木細工が収蔵されており、大シーボルトは、箱根と駿府の両方から蒐集していた事が判明している。明治時代になると、箱根畑宿の茗荷屋畑壮兵衛らが横浜本町に出店し、横浜港から高級家具として絢爛豪華な仕様の箱根寄木細工の品々が欧米に輸出された。明治三十一年（一八九八）には箱根物産合資会社が組織され、寄木細工を中心とした箱根物産の輸出はピークを迎えたのである。

本企画展は、複数のメディアにも取り上げられ、多くの来館者で賑わった。

（文責・渡邉卓・内川隆志）

特別展

「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」

研究の前提―國學院と伊豆

國學院大學では、大場磐雄さんが神道考古学を提唱する切掛けとなった伊豆地域の歴史・信仰に関する総合的な調査研究を継続して実施してきた。それらは、計画的に進められた場合もあれば、偶然の縁を得ての場合もあるが、三橋健さん（元神道資料館長）による式内社の研究、吉田恵二さん（元博物館長）らが手掛けた古代・中世遺跡の発掘調査、内川隆志さん（現博物館副館長）らが中心となって実施してきた旧考古学資料館による伊豆諸島の祭祀遺跡・和鏡研究など枚挙に暇がない。

とりわけ、椙山林繼さんを代表として、平成十九年度（二〇〇七）から文部科学省の支援を受けて実施したオープンリサーチセンター（ORC）整備事業では、大場磐雄さんの神道考古学を方法論的に鍛錬するためのフィールドとして伊豆地域を選定し、校史・考古・神道の各分野から、総合的な調査研究を推進した。ここに開催した國學院大學博物館の特別展「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」の発想も、その中から生まれ出た賜物である。

思い出されるのは、今から十五年ほど前の夏のこと。内川さんをはじめとするORC考古グループは、伊豆半島の祭祀遺跡をくまなく踏査していた。ある日、静岡県下田市の三穂ヶ崎にある修験窟で修験者たちが残した十五世紀に遡る墨書を観察していた僕に、内川さんがそっと囁いた言葉が忘れられない。これ三次元計測したら良くないか、と。しかし、そんな予算があるはずはなく、科研費を取ろうと考えたが、単に三次元計測したいなどという理由が通るわけもない。そこで、中世史料の乏しい伊豆修験について、考古学的な側面から追及する研究計画を立て、平成二十五年度（二〇一三）からの科研採択に至ったのであった。

この点、若干補足しておこう。江戸期における伊豆修験の代表的な年中行事の一つが、十二月十五日から翌正月二十八日にかけて、伊豆半島の縁辺を東回りに一周しつつ、定められた拝所を巡拝する「伊豆峯」の「辺路」修行であった。詳細は、約二六〇ヶ所になる拝所の所在などを記録した覚書である十八世紀の『伊豆峯次第』に詳しい。この修行は、『走湯権現当峯辺路本縁起集』の存在が示しているように、十三世紀末頃までに原型が成立していたが、度重なる火災もあってか、中世に遡る史料が殆ど残されていない。

そこで注目されるのが、十二月二十五日に巡る拝所の一つと『伊豆峯次第』に見える心檀堂之岩屋である（**写真**）。これは、下田市美穂ヶ崎に所在する修験窟であり、その壁面に残されていた墨書から、既に十五世紀段階には、十二月二十五日前後に同所で修行が行われたことが知られる。これらの事実は、辺路修行の原型が、既に十五世紀の時点で整っていたことをも示しているのだ。要するに、中世以来の伝統が近世まで受け継がれている伊豆修験の展開過程については、考古学的実態から文字資料の乏しさを補うことができるのである。

このような発想を得てから更に十年近い日々が過ぎ、ようやく研究の成果を博物館展示として世に問う時が来たが、まさに瓢箪から駒。國學院大學が蓄積してきた研究の上に、不思議なご縁が重なって、新しい研究を拓くことができたのである。

では、令和四年（二〇二二）十一月十二日（土）～令和五（二〇二三）年一月二十二日に実施した展示の概要についても簡単に触れておこう。

展示の概要

中世以来、前近代の伊豆国には、数多くの修験者たちがいた。彼らが拠った走湯山は、明治初年の神仏判然によって伊豆山神社と改められるまで、「走湯権現」「伊豆権現」などと呼ばれて広く信仰を集めた東国有数の霊場である。ここでは、日本独自の宗教である修験道の成り立ちや、その開祖とされる役行者神変大菩薩について触れた上で、伊豆走湯山の歴史・信仰と、これまで実態が語られてこなかった伊豆修験の姿について紹介したい。

ちなみに、この令和四年（二〇二二）は、いわゆる修験道廃止令が発せられた明治五年（一八七二）から数えて一五〇年の節目に当たる。近代国家の形成過程においては、その成否はともあれ、神道の国教化、神仏判然、世襲神職の廃止、陰陽道・修験道の禁止、仏教諸宗派の統廃合など、宗教の合理化も目指された。本展覧会は、かかる紆余曲折の中で失われた伊豆修験の伝承を、歴史学・考古学的な方法を通して復元しようとする試みの一端でもある。

・第Ⅰ章　日本古来の山岳信仰・山林修行

神道の原型が形作られた古墳時代から飛鳥時代までの山岳信仰は、あくまで山麓祭祀に止まるものであり、神々の領域へ人間が立ち入ることを禁忌としていたらしい。しかし、七世紀の半ば以降、山中にて仏道修行を行う山林寺院が現れる。また、八世紀の奈良時代に入ると入唐留学僧らによって古密教がもたらされ、金峯山のように山頂祭祀がはじまるなど、神仏の世界へ直接触れようとする原修験道的な信仰も形成されていった。

・第Ⅱ章　修験道のあゆみ

役行者を開祖とする修験道は、山頂祭祀が認められる八世紀から、峰々を巡る修行が各地ではじまった十世紀を経て、本尊たる蔵王権現像が定型化した十一世紀頃に宗教的独自性を確立する。中世のうちには、

天台系の本山派と、真言系の当山派が形成された一方、羽黒修験のような国峰修験も盛んとなった。中世末以降は、里修験へ転ずる者も多く、現世利益を求める庶民の信仰に応えたが、明治初年の神仏判然策によって大きな打撃を受けた。

・第Ⅲ章　走湯山と伊豆修験

十二世紀後半の『伊呂波字類抄』から走湯山の歴史を紐解くと、甲斐の賢安が承和三年（八六三）に走湯権現の示現を得て東明寺を開いたという。また、『梁塵秘抄』に「四方の霊験者は、伊豆の走湯、信濃の戸穏、駿河の富士山」云々とある通り、平安時代末までに伊豆修験の原型が形成された。富士山を開き、村山修験の祖とされた末代も走湯山の行者である。また、鎌倉時代のうちには、「伊豆峯」辺路修行など独特の教義・儀礼も整えられた。

・第Ⅳ章　修験筆頭の円光院

近世の走湯山には、別当般若院の下に、社僧十二坊、修験七坊、そして一山総菩提の成就坊が置かれていた。その内、修験の筆頭が円光坊であり、いまも当時の信仰を物語る資料が残されている。そこからは、自坊の本尊不動明王を祀り、伊豆峯辺路修行の先達を勤める山岳修験としての姿や、地域に根ざして人々の現世利益の希求に応える里修験としての姿、そして神仏判然後も生き残ってゆく伊豆山神社禰宜としての姿が見えてくる。

・第Ⅴ章　こんにちの伊豆山神社

明治初年の神仏判然策を受けて、別当般若院から独立した走湯権現は、社号を伊豆山神社と改めて今日に至った。走湯の湧き出る下宮から、相模灘を望む絶景の境内、そして白山社を経て本宮へ至る神域。かつて行者堂に祀られていた役行者像は、今も足立権現社として崇敬を集め、伊豆修験の名残を伝えている。

なお、展覧会図録は、会期中に完売したため在庫がないが、展示の概要についてはYouTubeサイトの「國學院大學博物館Online　Museum」をご覧頂きたい。

今後の展望―走湯山から三嶋社へ

さて、このような伊豆の宗教史研究だが、走湯山と箱根山・三嶋社との関係は切っても切れぬ深い縁がある。とりわけ三嶋社については、伊豆を代表する霊場であり、その研究を深めてゆくことは焦眉の課題であろう。

振り返れば、かつて内川さんたちが発掘した伊豆大島の和泉浜遺跡C地点は、天武天皇十二年（六八四）の噴火造島の神威に対して奉幣した考古学的痕跡である。三宅島では、古墳時代の勾玉形石製模造品や、奈良三彩も採集されており、島嶼部にも先端的な神祇祭祀の影響が及んでいたらしい。また、吉田さんたちが発掘した三宅島の中世積石塚は、三橋さんが研究を進めてきた『三嶋大明神縁起（三宅記）』の同時代遺跡である。要するに、三嶋大明神らを石神と説く『三宅記』や、それにまつわる古態を留める神事芸能は、考古資料と直接対比し得る「民族誌」となり得るのだ。そして、このような三嶋社の通史については、吉永博彰さんが精力的に取り組んでいる。

このように、噴火造島の古代三嶋神から中世以降の三嶋大明神に至る三嶋研究は、伊豆の半島部・島嶼部すべてをフィールドとする。そして、考古・神道・校史のみならず、地質、芸能、教育など、國學院大學内外の総力を挙げ、総合的に取り組むべき課題とすることができよう。

（文責・深澤太郎）

日本文化研究所
日本文化研究所研究会について

日本文化研究所では、昨年度よりオンラインでの研究会を定期的に開催することとし、昨年度は計八回の研究会を開催し、本年度は昨年中に六回の研究会を開催した。目的としては、一つには研究成果の対外的発信と社会還元であり、もう一つには研究者同士の相互交流をコロナ禍においても促進するためである。編集時期の問題で『機構ニュース』上で記事化するのは初めてであるため、昨年度の研究会も併せて報告する。なお、本年度については、年度内に更に数回の開催を予定している。

令和三（二〇二一）年度

◆第一回日本文化研究所研究会
日時：五月二十日（木）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：宮澤安紀（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「国際比較から見る現代日本の葬送文化――自然葬法の事例から」

◆第二回日本文化研究所研究会
日時：六月十六日（水）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：高田彩（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「昭和中期から平成中期における武州御嶽山の観光化の過程」

◆第三回日本文化研究所研究会
日時：七月十五日（木）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：木村悠之介（日本文化研究所研究補助員）
発表題目：「水戸学の神道論における「固有」―儒教と身体性への視座をめぐる藤田東湖の位置」

◆第四回日本文化研究所研究会
日時：九月十六日（木）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：藤井修平（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「宗教学理論史から見る認知科学的・進化生物学的宗教理論」

◆第五回日本文化研究所研究会
日時：十月二十八日（木）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：丹羽宣子（日本文化研究所客員研究員）
発表題目：「日蓮宗女性教師をめぐる現状と課題」

◆第六回日本文化研究所研究会
日時：十二月十五日（水）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：古畑侑亮（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「明治初期における考古学的知識の受容と遺跡・遺物観―埼玉県域の国学者を中心に―」

◆第七回日本文化研究所研究会
日時：一月二十日（木）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：問芝志保（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「現代都市社会と家墓の継承―神戸市の旧共有墓地を事例に―」

◆第八回日本文化研究所研究会
日時：三月十七日（木）十八時三十分～二十時三十分、於オンライン。
発表者：大場あや（日本文化研究所研究補助員）
発表題目：「住民組織から見る葬制変容のメカニズム―契約講の連合と冠婚葬祭の「共同化」―」

令和四（二〇二二）年度

◆第一回日本文化研究所研究会
日時：六月六日（月）十九時～二十時、於オンライン。
発表者：長見菜子（日本文化研究所研究補助員）
発表題目：「『古事記』「軽太子物語」の諸問題―文章表現からみる寓意性―」

◆第二回日本文化研究所研究会
日時：六月三十日（木）十九時～二十時四十分、於オンライン。
発表者：川嶋麗華（日本文化研究所助教（特別専任））
発表題目：「近現代における火葬習俗の変遷―遺体処理にみる伝承性―」

◆第三回日本文化研究所研究会
日時：七月二十八日（木）十九時～二十時四十分、於オンライン。
発表者：藤井修平（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「ビッグ・ゴッド理論の検討―宗教認知・進化学的展開の一側面として―」

◆第四回日本文化研究所研究会
日時：八月二十五日（木）十九時～二十時四十分、於オンライン。
発表者：木村悠之介（日本文化研究所研究補助員）
発表題目：「近代神道雑誌史・出版史の新たな展望」

◆第五回日本文化研究所研究会
日時：十月二十七日（木）十九時～二十時四十分、於オンライン。
発表者：武井謙悟（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「開帳の近代―近世との連続／断絶」

◆第六回日本文化研究所研究会
日時：十一月三十日（水）十九時～二十時四十分、於オンライン。
発表者：大場あや（日本文化研究所ポスドク研究員）
発表題目：「葬儀・墓をめぐる国家政策と改革運動の展開―日中比較研究に向けて―」

いずれの会も三〇名程度の参加者を得て、充実した発表と活発な質疑応答が行われた。

（文責・星野靖二）

宮地直一旧蔵資料の調査・研究・展示

宮地直一（一八八六～一九四九）は神道史学者であり、現在の神道史研究の基礎を築いた一人である。その研究の中で収集した資料は、平成十四・十五年に本学日本文化研究所によって調査が行われ、その後、宮地家により寄贈された。

この資料群は、同研究所や伝統文化リサーチセンターによって調査・整理・研究が行われ、現在は学術資料センター（神道資料館部門）が調査・研究を継続して行っている。

この成果の一端は、本年度、國學院大學博物館 神道展示室で行った特集展示「宮地直一と熊野信仰研究」（会期：令和四年十月十七日～十二月四日）、同「宮地直一と天神信仰」（会期：令和五年一月二十八日～三月二十六日）で公開した。前者は、熊野信仰にかかわる資料の調査を担当した髙橋あかね（本機構 研究補助員）、後者は松本菜摘美（本学大学院 特別研究生・本機構臨時雇員）・髙橋が企画ほかを担当した。以下、その概要を示す。

（文責・大東敬明）

宮地直一と熊野信仰研究

令和四年は、宮地直一が「熊野三山を中心としたる神社の史的変遷」によって学位を取得した大正十一年（一九二二）から百年であった。本部門では、宮地直一旧蔵資料の調査研究を進める中で、熊野信仰に関する資料と著作との関係の研究を行ってきた。この成果の一端が特集展示「宮地直一と熊野信仰研究」である。

宮地は明治四十一年（一九〇八）に「八幡宮の研究」を提出して東京帝国大学（現・東京大学）を卒業し、早くから神祇信仰について研究を行っていた。

熊野信仰についてもこの頃から研究を続けており、明治四十二年に皇典講究所神職養成部での講義内容をまとめた『神祇史』（皇典講究所國學院大学出版部、一九一〇）にも熊野信仰に関する記述がみられる。

展示では、学位記や『熊野三山の史的研究』の入稿原稿（自筆原稿を含む）をはじめ、熊野信仰に関わる原稿・ノート類を展示した。

『熊野三山の史的研究』は宮地の没後、「熊野三山を中心としたる神社の史的変遷」に編集を加えたもので、昭和二十九年（一九五四）に出版された。その内容は熊野三山について、起源から中世に至るまでの総合的な研究をまとめたものである。本展で展示した「承久の役と熊野三山」原稿は、本書の一部をもとに宮地が加筆したものと考えられる。この校正内容が反映された論文は、管見の限り見いだせておらず、現時点では未発表論文であると考えている。

宮地が大学院在学中、提出した草稿とみられる資料「明治四十二年大学院報告書（案）」には、主に神祇信仰に関する研究報告が見え、春日や八幡の内容と並んで熊野に関する記述が多く、熊野信仰に対する関心の高さがうかがえる。

宮地の研究方法は、様々な文献資料をもとに進めることを基本としていた。展示した『神祇雑々』や『九十九王子記』（ともに本学図書館蔵宮地直一旧蔵資料）等は論文との関わりも見られ、手元に様々な資料があったことが分かる。このような文献考証を基本とする姿勢は、卒業論文を提出した頃から一貫していた。

（文責・髙橋あかね）

天神図
（宮地直一旧蔵）

宮地直一と天神信仰

宮地直一旧蔵資料には、様々な神社信仰の資料が含まれる。天神図・天神人形など、天神信仰に関する資料も多く、その関心の高さがうかがえる。このことは、宮地が潮江天満宮（高知県）の社家に関わる家の生まれであったことが関連しているともされる。

この天神人形は、同資料群をご寄贈いただいたのち、旧日本文化研究所をはじめ、長年にわたり調査・整理作業が行われてきた。令和四年度は、これまでの調査内容を踏まえ、状態の確認や採寸、資料の撮影などの再調査作業を行った。

宮地直一旧蔵資料の天神人形は三四〇体以上ある。資料の産地は全国に及び、花巻土人形（岩手県）や高松土人形（香川県）、帖佐土人形（鹿児島県）などを宮地直一自身が書き込んでいることもある。

これまでの調査作業の成果としては、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館にて、特別展「天神像―天神さまと天神人形―」（平成十七年（二〇〇五）十月十八日～十二月十八日）が行われている。

特集展示「宮地直一と天神信仰」では、宮地が収集した全国各地の天神人形のほか、『文神としての天神の信仰』（東京出版協会、一九三六）の原稿や、室町後期に作成された天神図など、宮地直一の天神信仰研究に関する資料を展示した。

これらの資料は、今後も引き続き調査・整理作業を行っていく予定である。

（文責・松本菜摘美）

「天神人形」（十日市土人形）
（宮地直一旧蔵）

令和四年度　活動報告
「國學院大學「古典文化学」の創出研究事業」

事業概要・目的

本事業は、國學院大學が平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」（タイプB・世界展開型）として選定された「「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―」研究事業を継承するもので、令和三年度研究事業「神道と日本文化の創造的「古典学」―令和の新しき国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。

本事業では、「国学」に由来する本学の「古典」研究をより一層、発展させることを目的とし、中期五ヵ年計画に基づき五年間にわたり以下の事業を推進していくものである。

①国際シンポジウム・ワークショップ等の開催
②『古事記』・『万葉集』の文献学的研究
③「国学」的「古典」研究の再検討
④研究成果の教育還元
⑤「古典学総合データベース」の構築
⑥研究成果の社会発信

これらの事業により、本学の「古典」研究をより一層発展させていく。本年度実施した、それぞれの事業内容の詳細は、次の通りである。

事業報告

①研究フォーラムの開催

本年度は、天孫降臨神話を考えることをテーマに、飯泉健司氏（埼玉大学教育学部教授）を講師に迎え、一月二十七日（金）十七時～十八時半にZoom（オンライン）にて研究フォーラムを開催し、約八〇人が参加した。発表題目は次の通り。

・「なぜ高千穂から始まるのか―天孫降臨神話の舞台裏」

また、次年度以降のシンポジウム開催に向けて、鹿児島県（霧島神宮、鹿児島神宮）と宮崎県（宮崎神宮）に出張し、関係者と打合せした。

②－一　定例研究会の開催

本年度はZoom（オンライン）にて四回開催した（いずれも十八時～十九時三十分）。研究会では、『古事記』の本文校訂・註釈の検討を中心に、教員・研究員による発表・報告を行った。各回の日時・発表内容は次の通り。

○第一回（令和四年五月二十七日）
・「古事記注釈」検討：古事記注釈（三五）「大年神の系譜」（谷口雅博・小野諒巳）
○第二回（令和四年七月二十九日）
・「古事記注釈」検討：古事記注釈（三六）「葦原中国平定（一）」（谷口雅博・小野諒巳）
・「『古事記』の絵本化についての考察―黄泉国神話を対象に―」（鶉橋辰成）
○第三回（令和四年九月三十日）
・「古事記注釈」検討：古事記注釈（三七）「葦原中国平定（二）」（谷口雅博・小野諒巳）
・補注解説「韓神」「阿須波神」「いたくさやぎてありなり」（土佐秀里）
○第四回（令和四年十一月二十五日）
・「古事記注釈」検討：古事記注釈（三八）「葦原中国平定（三）」（谷口雅博・小野諒巳）

②－二　古事記研究データベース

「古事記学」から継承する古事記研究データベースを補填・更新した。令和五年一月末日現在で、神名データベースは総数三〇六件、氏族データベースは総数八六件を公開した。

②－三　『古事記』注釈の英訳

「古事記学」以来、海外へ『古事記』研究を拡げていくことを目的に継承されてきた『古事記』注釈の英訳は、『古事記學』第四号第十八章（天の石屋②）まで行っている（令和五年一月末日現在）。

③－一　『万葉新採百首解』の翻刻

「国学」の現代的意義を考える研究として、「古典学」事業から引き続き、賀茂真淵『万葉新採百首解』（京坂二書肆版）の翻刻作業を行った。翻刻は「古典文化学」事業ホームページで公開している。

③－二　「井上氏旧蔵資料」の整理

本学所蔵「井上氏旧蔵資料」を整理し、簡易目録の作成を進めている。同資料群は、皇典講究所の創設に深く関わった井上頼圀、神宮皇学館の教授をつとめた頼文、近畿地方の民俗を調査した頼寿の三代にわたるコレクションである。令和五年一月末日現在、頼文の代までの目録情報の入力をおおよそ終えている（約一二〇〇点）。

③－三　国学関連資料の出張調査

近世・近代の国学者・神道関係人物の人的・知的ネットワークの再検証を目指す一環として、千葉県（飯香岡八幡宮）と神奈川県（大山阿夫利神社）に出張し、神道事務分局や皇典講究分所など近代神道・国学関係の資料調査を行った。

④研究成果の教育還元

若手研究者の育成を図る一環として、本事業に関わる研究成果を専任・兼担教員の担当科目に還元した。

⑤「古典学総合データベース」の構築

本事業の研究成果を、Webを中心に発信することを目的に、「古典学総合データベース」の構築のための基盤整備を行った。本年度は、『古事記』に登場する神や天皇を中心とする人々を系図化した「古事記系図」を公開した。

⑥本年度の研究成果

『古事記』注釈及び同注釈の英訳は、『國學院大學研究開発推進機構紀要』十五号（令和五年三月）に掲載する。各種データベースの成果は「古典文化学」事業ホームページで公開している。

（文責・渡邉　卓）

令和四年度 國學院大學博物館活動報告

活動報告

令和四年度は、博物館の展示・公開として、特別展一回、企画展四回、特集展示を四回開催した。八月二十七日（土）までは、昨年度に引き続き、短縮開館（水～土曜日・十二時～十七時）の形態で運営し、社会的な情勢も鑑みて、八月三十一日（水）から短縮開館を解除した（火～日曜日・十時～十八時、平日月曜日のみ休館）。館内における新型コロナウイルス感染症対策は、昨年度の体制を踏襲しつつ、部分的に緩和しながら運用を継続した。

その他、昨年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策を継続・推進した。

展示公開（表1）

【特別展・企画展・特集展示】

・春の特別列品「鎌倉幕府と執権政治―國學院大學図書館の名品―」（図録刊行）、会期：令和四年四月二日～五月十四日。主催：当館、國學院大學図書館。

・企画展「沖縄復帰50年　うちなーぬ　ゆがわりや　琉球・沖縄学と國學院」（図録刊行）、会期：令和四年五月十九日～七月二十三日。主催：当館。

・企画展「國學院大學創立１４０周年記念　近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦寄木細工コレクション―」（図録刊行）、会期：令和四年八月三十一日～十一月六日。主催：國學院大學、当館（國學院大學創立１４０周年記念事業の一環として実施）。

・特別展「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」（図録刊行）、会期：令和四年十一月十二日～令和五年一月二十二日。主催：当館。＊

・企画展「物語絵―嫁入本『源氏物語』全54帖公開―」（ハンドブック刊行）、会期：令和五年一月二十八日～三月二十六日を予定。主催：当館。

（＊は国宝の借用を伴う。特集展示は表1を参照。）

表１　令和４年度　展示内容と関連事業

展示（会期）		関連事業	
特別展	走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―（R4.11/12～R5.1/22）	オンラインミュージアム	12/3 深澤太郎（本学准教授）「特別展「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」を展示解説！」
企画展	春の特別列品 鎌倉幕府と執権政治―國學院大學図書館の名品―（R4.4/2～5/14）	オンラインミュージアム	4/16 高橋秀樹（本学教授）「春の特別列品「鎌倉幕府と執権政治」を特別解説！」
企画展	沖縄復帰50年　うちなーぬ ゆがわりや　琉球・沖縄学と國學院（R4.5/19～7/23）	オンラインミュージアム	6/11 池田榮史（本学教授）「企画展「うちなーぬ ゆがわりや　琉球・沖縄学と國學院」展示解説！」、7/2 渡慶次馨（波上宮宮司）・宜保榮治郎（元沖縄県立博物館館長）・黒島昭男（元㈱RBCビジョン代表取締役社長）・新垣裕之（元西原町文化財保護審議会委員）「復帰前後の「留学生」たち―琉球・沖縄の世変わりと國學院―：沖縄復帰50年特別インタビュー」、7/11 同ダイジェスト版、唄：山里純一（琉球大学名誉教授）「八重山民謡：企画展「うちなーぬ ゆがわりや　琉球・沖縄学と國學院」関連動画」
企画展	國學院大學創立140周年記念 近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦 寄木細工コレクション―（R4.8/31～11/6）	オンラインミュージアム	9/17 渡邉卓（本学准教授）・田中潤（本学客員研究員）「創立140周年記念 企画展「近代工芸の精華」より―有栖川宮家・高松宮家ゆかりの工芸美―」、10/8 金子皓彦（本学客員教授）、内川隆志（本学教授）「創立140周年記念 企画展「近代工芸の精華」より―日本の美・寄木細工―」
企画展	物語絵―嫁入本『源氏物語』全54帖公開―（前期：R5.1/28～2/26、後期：3/1～3/26）　予定		
特集展示	伊勢のおふだ（R4.6/29～7/30）（協力：神宮司庁広報室・埼玉県神社庁・神社本庁）		
特集展示	高倉家調進控―織り出された鳥たち―（R4.7/6～7/23）		
特集展示	教派神道の創始者たち（R4.8/31～10/16）		
特集展示	宮地直一と熊野信仰研究（R4.10/18～12/4）		
特集展示	宮地直一と天神信仰（R5.1/28～3/26）　予定		

教育普及

教育普及事業では、展示公開に関連するミュージアムトークの動画を制作し、当館YouTubeチャンネル「オンラインミュージアム」にて、公開した（内容・公開日は表1を参照）。

また、本学学芸員課程の博物館実習に対して、学芸員の業務内容を示した教材動画を作成・提供し、資格取得課程との連携を強めた。

環境整備・営繕

展示空間の空気質・温湿度を良好なレベルに維持させるための施策やＩＰＭ（総合的有害生物管理）を実施し、資料保護・管理運営の質的向上に取り組んだ。また、展示環境改善の一環として、免震ハイケースを改修した。新型コロナウイルス対応は、関連のガイドラインを踏まえて各種対策を継続した。

運営支援

開設五年目を迎えたミュージアムショップは、店頭販売に加えて配送販売の利用数も好調を維持している。また、ウェブサイト、ＳＮＳ、外部サイトで積極的な情報発信を行い、多数の来館者・視聴者の獲得につながっている。

本年度の入館者数は、令和五年一月末日現在、約二万八〇〇〇人となり（表２）、コロナ禍以降最多の来館数を得ている。実際の展示とオンラインの双方で工夫を凝らしながら、本学の研究および学術資料の公開・活用を推進する博物館運営を目指していく。

（文責・國學院大學博物館）

表２　令和４年度入館者数

月	（名）
4月	2,194
5月	1,950
6月	2,153
7月	1,891
8月	4,221
9月	2,170
10月	5,555
11月	3,919
12月	1,992
1月	2,057
合計	28,102

令和５年１月末日現在

彙報

会議

○全体

- 令和四年度臨時運営委員会、令和四年七月七日(木)、若木タワー地下一階会議室〇二
- 令和四年度第二回運営委員会、令和四年九月二十二日(木)、若木タワー五階〇五〇二教室
- 令和四年度第三回運営委員会、令和四年十一月十日(木)、若木タワー地下一階会議室〇二
- 令和四年度第四回運営委員会、令和五年一月十二日(木)、若木タワー地下一階会議室〇二
- 令和四年度第二回企画委員会、令和四年七月六日(水)、メール審議
- 令和四年度第三回企画委員会、令和四年九月十六日(金)、AMC棟五階会議室〇六
- 令和四年度第四回企画委員会、令和四年十一月八日(火)、メール審議
- 令和四年度第五回企画委員会、令和五年一月十日(火)、メール審議
- 令和四年度第二回人事委員会、令和四年十一月九日(水)、AMC棟五階会議室〇六
- 令和四年度第三回人事委員会、令和五年二月六日(月)、AMC棟五階会議室〇六
- 令和四年度第二回教員等資格審査委員会、令和四年十一月九日(水)、AMC棟五階会議室〇六
- 令和四年度第三回教員等資格審査委員会、令和五年二月六日(月)、AMC棟五階会議室〇六

○日本文化研究所

- 令和四年度第二回所員会議、令和四年六月二十九日(水)、オンライン会議
- 令和四年度第三回所員会議、令和四年八月二十九日(月)、オンライン会議
- 令和四年度第四回所員会議、令和四年十月二十六日(水)、オンライン会議
- 令和四年度第五回所員会議、令和四年十二月二十一日(水)、メール審議

○学術資料センター

- 令和四年度第二回学術資料センター、令和四年九月一日(木)、オンライン会議
- 令和四年度第三回学術資料センター、令和四年十二月二十三日(金)、AMC棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

- 令和四年度第一回校史・学術資産研究センター会議、令和四年六月十五日(水)、メール審議
- 令和四年度第二回校史・学術資産研究センター会議、令和四年八月三十日(火)、メール審議

○研究開発推進センター

- 令和四年度第二回研究開発推進センター会議、令和四年九月一日(木)、オンライン会議

○國學院大學博物館

- 令和四年度第二回國學院大學博物館会議、令和四年九月三日(土)、メール審議
- 令和四年度第三回國學院大學博物館会議、令和四年十二月二十三日(金)、オンライン会議

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- 令和四年度國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会「国学者の近代～学問の蓄積と継承～」、令和四年十一月十九日(土)十五時～十六時三十分AMC棟一階常磐松ホール、講師＝大沼宜規（国立国会図書館司書）

○日本文化研究所

- 国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化 Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective」、令和四年十二月十一日(日)十三時～十七時三十分、百二十周年記念二号館 一階二一〇一教室、第一部「大学ミュージアムの中の宗教文化」発表＝深澤太郎(國學院大學博物館准教授)「来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化」、熊谷貴史（佛教大学宗教文化ミュージアム学芸員）「展示するモノと展示するコト：仏教文化の視点から」、下園知弥（西南学院大学博物館助教・学芸員）「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」、コメント＝田澤恵子（公益財団法人古代オリエント博物館研究部研究部長）、第二部「多様性の中の日本の宗教文化」発表＝エミリ・アンダーソン（全米日系人博物館学芸員）「強制収容所内の信仰と宗教：アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験」、北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」、コメント＝高橋典史（東洋大学社会学部国際社会学科教授）

○國學院大學研究開発推進センター

- 令和四年度研究開発推進センター公開講演会「国連SDGsの役割と人類社会の行方 ～共存・共生の未来～」、令和四年七月二十一日(木)～、オンライン配信、講師＝古沢広祐（國學院大學研究開発推進機構客員教授）
- 令和四年度古典文化学研究フォーラム「天孫降臨神話を考える」、令和 五年一月二十七日(金)十七時～十八時三十分、講師＝飯泉健司（埼玉大学教育学部教授）「なぜ高千穂から始るのか―天孫降臨神話の舞台裏」

出張

○学術資料センター

・池田榮史・楠恵美子、「和歌山県みなべ町晩稲久地峠出土袈裟襷文銅鐸の資料調査」のため、令和四年六月十七日(金)～六月十八日(土)、奈良県奈良市

・内川隆志・深澤太郎・吉永博彰・大山晋吾、「三宅島における三嶋信仰に関する総合調査」のため、令和四年十月八日(土)～十月十一日(火)、東京都三宅島

・深澤太郎、「特別展「走湯山と伊豆修験」開催にともなう御礼および報告」のため、令和四年十二月十六日(金)、奈良県吉野郡吉野町

・深澤太郎・大山晋吾、「三宅島における三嶋信仰に関する総合調査」のため、令和五年一月五日(木)～一月八日(日)、東京都三宅島

・深澤太郎・吉永博彰、「伊豆半島南部における三嶋信仰に関する総合調査」のため、令和五年一月二十七日(金)～一月二十八日(土)、静岡県下田市、伊豆市

○研究開発推進センター

・渡邉卓、「神宮文庫における神道古典関連資料の調査」のため、令和四年九月九日(金)～九月十日(土)、三重県伊勢市

・半田竜介、「飯香岡八幡宮における近代神道・国学に関する資料調査」のため、令和四年九月二十四日(土)～九月二十五日(日)、千葉県市原市

・渡邉卓、「次年度シンポジウム打合せ及び資料調査」のため、令和四年十一月二十日(日)～十一月二十一日(月)、鹿児島県霧島市

・渡邉卓・半田竜介、「大山阿夫利神社における近代神道・国学に関する資料調査」のため、令和四年十一月三十日(水)、神奈川県伊勢原市

・渡邉卓、「次年度シンポジウム打合せ及び資料調査」のため、令和五年一月二十日(金)～一月二十一日(土)、宮崎県宮崎市

○國學院大學博物館

・池田榮史・深澤太郎、「企画展「沖縄復帰五十年琉球・沖縄学と國學院」展示品返却」のため、令和四年七月二十七日(水)～七月二十九日(金)、沖縄県那覇市

・深澤太郎、「特別展「走湯山と伊豆修験」での京都大学附属図書館所蔵『伊豆峯次第』の借用にかかる特別観覧」のため、令和四年八月十日(水)、京都府京都市

・内川隆志、「第七十回全国博物館大会参加」のため、令和四年十一月十六日(水)～十一月十九日(土)、高知県高知市

・深澤太郎、「特別展「走湯山と伊豆修験」展示品集荷」のため、令和四年十一月二十四日(木)～十一月二十五日(金)、京都府京都市

・深澤太郎、「特別展「走湯山と伊豆修験」展示品返却」のため、令和五年一月二十三日(月)、京都府京都市

刊行物

○全体

・研究開発推進機構『機構ニュース』通号三十一（令和四年六月二十五日発行）

○日本文化研究所

・日本文化研究所『日本文化研究所年報』第十五号（令和四年九月三十日発行）

資料紹介

奈良県吉野郡天川村　金峯山経塚出土遺物

奈良県吉野郡天川村山上ヶ岳（標高一七一九m）には、十一世紀から十三世紀頃を中心とする金峯山経塚がある。この金峯山頂には、大峯山寺（山上蔵王堂）が営まれているが、その解体修理によって、八世紀に遡る護摩修行の痕跡が発見された。恐らく、修験道以前の古密教的修法が行われていた事実を示すのであろう。また、経巻を納めた経筒とともに、多数の品々を埋納した大規模な経塚群は、蔵王堂南方に屹立する湧出岩の麓に造営されたものであり、江戸時代以来、既に数百点もの遺物が採集されてきた。藤原道長が奉納した寛弘四年（一〇〇七）在銘の経筒（金峯神社蔵）も、その一つに数えられる。ちなみに、『御堂関白記』によれば、八月二日に京を出た道長は、十日に金峯山へ至り、翌十一日に法要を行って経筒を埋納の後、十四日に帰京したという。

出土遺物は、五十点に及ぶ経筒をはじめ、経箱、八稜鏡などの鏡鑑類など、十一世紀から十二世紀のものが中心であり、國學院大學博物館が所蔵する金峯山経塚出土資料も共通した傾向を示している。その内、一点の八稜鏡の鏡面には、修験道の本尊である蔵王権現像が線刻されていた。蔵王権現は、修験道の開祖とされる役行者が湧出岩で祈り出した仏と伝わり、釈迦・観音・弥勒の三仏を本地とする。憤怒の形相と、右手・右足を高く上げる独特の像容は、十一世紀頃に定型化したとされるが、三鈷杵を握りしめた右手の表現を残す本例も、そうした流れに連なる作品の一つであろう。

（文責・深澤太郎）